

# 経験・教訓の伝承と支援のリレー

## 受け継いだ経験と教訓

中越大震災発生当時、市民も行政も巨大な自然災害にどう対応すればいいかといった復旧・復興活動の基礎となるべき情報や経験を持っていませんでした。その時、応援に駆け付けてくれた神戸市職員は、阪神・淡路大震災からの様々な経験と教訓を惜しみなく伝えてくれました。また、同じく阪神・淡路を契機に本格化した災害ボランティアが中越でも活躍、復旧・復興のために尽力してくれました。



活躍するボランティア(浦柄)

このように、私たちは過去の災害被災地から、様々な経験や教訓をリレーとして受け継ぎ、復興に向けてあゆんできました。

## 次世代、そして全国へのリレー

この10年間のあゆみの中には、様々なつらい経験も、うまくいった、あるいはうまくいかなかった教訓も含まれています。

私たちが受け取ったバトンに、自分たちの経験と教訓を合わせて、震災後に生まれ育った世代に、あるいはこれから災害が予測される全国にリレーし継承していくことは大切なことです。

震災から10年を迎え、当時のことを経験していない市民が増えています。また、災害を経験していない地域では、かつて私たちの多くがそうだったように、災害に対してのそなえや心構えが整っていないものです。そういった次世代あるいは全国の人々に、我々が体験した、大変だったあの経験と教訓をぜひ生かしていただくため、記録の発信や語り部活動など様々な方法で継承していく必要があります。

## 「中越大震災の日」の制定

中越大震災の経験と教訓を語り継ぎ、市民一人ひとりが防災意識を高め、安全安心に対する誓いを新たにするとして、毎年10月23日を「中越大震災の日」として条例で制定しました。

# 新たな小千谷への挑戦宣言〜震災を乗り越え、未来へ

平成17年に復興計画を策定したとき、小千谷市民は震災によって被害を受け、打ちひしがれていました。震災によって失われた命、多くの家や日々の暮らしを壊された「あの日」のことを、今でも忘れることができません。その中で希望を探し、必死にもがきながら、よりよい未来を目指した復興計画を策定し、10年間かけて実行してきました。



都会から移住した地域おこし協力隊が地域活性化のために活動中

これまで市民は、全国からの温かい支援に励まされながら、復興に向けてそれぞれができる範囲で一杯あゆんできました。震災後途絶えていた闘牛などの伝統行事が復活、壊された棚田や養鯉池を再建、今まで以上にまちを元気にしようとして活動する市民グループの活躍など…。

中越大震災から7年目の3月11日、東日本大震災が発生しました。「あの日」を思い出す、凄まじい揺れ、そして津波。現地に行った人、避難者を受け入れた人、それぞれが被災地への支援を行う中で、市民は「支援される側」から「支援する側」に大きく転じました。

今は震災の爪痕のほとんどが修復され、大震災があつたことを感じる場所は少なくなりました。でも、私たちは「あの日」のことを決して忘れません。そして、これまでの道のりを決して忘れることはありません。

復興計画を終了を迎える平成26年は、中越大震災から10年を迎えると同時に、市制施行60周年にあたり、人生のスタートです。小千谷市誕生から60年間の発展と、震災から10年のあゆみによって得た知恵と努力を紡ぎながら、「あの日」の経験と教訓を語り継ぎ、市民みんながよりよい小千谷を創っていくかなければなりません。「誰もが生涯楽しく住み続けることのできるまち」小千谷を創る、未来への新たな挑戦を始めます。



中越大震災10周年式典で「ゆめいっぱい小千谷」を合唱する東小千谷小学校児童



式典で新たな小千谷への挑戦を宣言する谷井前市長



「中越大震災ネットワークおちや」による災害時の対応を学ぶ研修会



「中越大震災ネットワークおちや」が第18回防災まちづくり大賞において総務大臣賞を受賞

【復興検証】

2004.10.23  
2014.  
中越大震災からの10年